

Title	ロナルド・スケルドン編, 可児弘明, 森川真規雄, 吉原和男監訳 『香港を離れて : 香港中国人移民の世界』
Sub Title	
Author	川崎, 有三(Kawasaki, Yuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1998
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.67, No.3/4 (1998. 7) ,p.187(547)- 194(554)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0187">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0187</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロナルド・スケルドン編、可児弘明、森川眞規雄、吉原和男監訳  
『香港を離れて——香港中国人移民の世界——』行路社、一九九七年

川崎 有三

一九九七年七月一日に中国に返還された香港が今後どのようなものになっていくのか。それは中国のみならず東アジアあるいは環太平洋地域、さらに二十一世紀の世界がどう変わっていくのかを占う重要なポイントである。本書は一九九三年までに香港から出ていった移民たちの姿をカナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、シンガポールの豊富な実例をあげながら描いたものである。執筆者は地理学、歴史学、人類学、社会学、心理学、政治学、教育学、都市計画、中国学と実に多様な分野の専門家たちからなっており、その勤務先もイギリス、アメリカ、ニュージーランド、香港、オーストラリア、カナダと各地域に散在しており、文化的背景は中国系と欧米系が相半ばしている。さらに研究的キャリアも大学院生から名誉教授まで実に幅広く、ま

た異なる専門の者による共著の論文も数多い。分析の視点もマクロとミクロがよくミックスされている。本書はまえがきで編者スケルドン自身が「香港という土地の産物であり」、「ファックスと電子メールが本書を生み出したようなもの」と述べている通り、まさに異質のものがネットワークによって結びつき、香港中国人移民という最も現代的で熱く煮えたぎっている対象に肉薄しようとした野心的な試みである。

読者の便宜のために本書の大雑把な構図を以下に示す。全体は七部に分けられ、第一部序説で地理学者のスケルドンがイントロダクションを書き、また最後の第七部結論で現在の動向と今後の研究課題について述べている。第二部歴史的・地理的背景で、同じくスケルドンが第二章「国際移動システムのなかの香港」で香港における移民

現象を概括し、三章「人を集めて、送りだす」で人類学者ハーデイが移民アドバイザーという特殊な職業の実態を明らかにし、四章「中国人移民の適応組織」で歴史学のウィックバーグが方言ごとの「会館」や「宗親会」などの組織が歴史的にどのような役割を果たしてきたかを検討している。

第三部から第六部までは言わば地域ごとの分類で、第三部は香港移民が最も集中しているカナダに当てられ、五章「香港からカナダへの移民」で社会学者のジョンソンと歴史学者のラリーがカナダへの香港移民の概要を述べ、六章「カナダへのビジネス移民」で人類学者のスマートがビジネス移民という特殊な資格の移民について、その個別の事例から移民たちの抱える問題について論じている。七章「香港中国人移民とバンクーバーの中国人コミュニティ」では社会学者ジョンソンが中国人社会の多様性を指摘し、八章「トロントにおける香港中国人移民」ではラリーと教育学者ルックが、トロントの変化しつつある社会経済状況を背景に香港中国人移民の特徴を論じている。九章「安寧の避難地をもとめて」では社会学者ラムがやはりトロントに焦点をあてて、個々の移民の抱える問題を彼ら自身の言葉で語らせている。

第四部はオセアニアで、十章「香港中国人のオーストラリアへの移住と定住」では心理学者キーとスケルドンがオーストラリアにおける香港中国人移民の分布や社会的特徴を論じ、十一章「シドニーの香港中国人」では社会学者イングリスと都市計画のウーが、十二章「オー克蘭ドの香港中国人」では心理学者のホーと地理学者のファーマーがそれぞれの地域の香港中国人の移民社会について詳細に述べている。

第五部はアメリカ合衆国で、十三章「サンフランシスコの香港中国人移民」では人類学者のウォンが七章のジョンソンと同じように中国人移民社会の多様化を、十四章「ニューヨークは香港ではない」では政治学者クォンがニューヨークでの中国人社会の形成をテーマに、十五章「ハワイの香港中国人」では社会学者シャボット、社会学専攻の大学院生オイ、社会学者ソーがハワイにおける香港中国人の非定着性を述べている。

第六部はやや無理なヨーロッパとアジアというタイトルのもとに、十六章「全土にひろがる枝葉」で中国学者ベイカーがイギリスにおける香港中国人の分散の過程をたどり、十七章「エスニシティ・パレードックス」では社会学者チャンがシンガポールにおける香港中国人の異質

性と適応の過程について述べている。

まず、本書が我々にもたらしてくれる有用性について指摘しよう。第一に本書は我々に様々な種類のマクロな指標を与えてくれる。つまりセンサス等の統計資料のデータを地域別に豊富に載せている。表の数だけで四十一もあり、特に二章、六章、十二章に多い。表の多くは単年度のものではなく時系列にならべられており、また香港以外の地域からの移民の統計を含むものもいくつかあり、この統計資料だけでも、近年の移住の動態が克明に表されていて、つい引き込まれて見とれてしまう。とりわけ二章で用いられた一九八〇年代から一九九〇年代初めにかけてのカナダ、アメリカ、オーストラリアへのアジア諸国からの移民の統計資料は香港中国人だけでなく、他のアジア地域に住む中国人たちの動向も恐らく示しているように思えて大変に興味深い。

しかし、統計資料の数字は必ずしも現実社会の実態をそのまま反映したものではない。本書の各論文でやや物足りないのは、統計資料の数字に対するそれぞれの筆者からの評価が十分にされていないように思えないところである。公の機関によって公表される統計資料は言わば現実の数字の近似であり、近似が意味をもつとすれば、正

当な評価が必要である。無能な社会学者はいたずらに細かな数字を並べ、空疎な精密さを誇示するだけだが、現実に迫ろうとする真摯な社会学者にとっては統計資料の評価は必須の作業だろう。

第二に本書は我々に香港中国人移民の個別の具体的なイメージを伝えてくれる。六章のカナダへのビジネス移民の事例研究、九章のトロントへの移民の二十八例のインタビュー調査、十五章のハワイへの移民のインタビュー調査、十七章のシンガポールでの面接調査の中で我々は移民たちの生の声を聞き、具体的なイメージを作りだすことができる。他の章においても執筆者たちの姿勢は常にそれぞれの地域でのフィールド・ワーカーとしてのものである。また執筆者の何人かは移民性を強くもった中国人たち自身であり、外からの研究というよりもむしろ内からの研究という色彩が少なくないことも、この論文集をより魅力的なものにしている。

では次に、本書で描かれる香港中国人移民たちの姿から、果して中国人たちは二十一世紀の世界を変えてしまふのかどうかという大問題をこれから考えようと思う。

## 一・香港社会の特質について

香港社会ほど発展のスピードの速い社会は他に例がな  
いかもしれない。一八四一年のイギリスによる占領以来、  
人口は多くの流入をかかえながら増加していき、一九  
四一年には百六十万人を越え、一九八一年には五百万人  
を突破した。香港は中国本土から海外への移民の中継地  
という性格を強くもっていたが、香港生まれの居住者の  
割合は一九〇一年の六、七%から一九九一年には約六  
十%までに増加している。この間に香港は製造業を中心  
とした工業化を成し遂げ、さらにアジアの金融センター、  
観光拠点としても重要な役割を果たすようになった。

第二次大戦後、中国本土の共産党政権と台湾の国民党  
政権の二つの中国が並び立つ時代が形成されてきたが、  
しかし香港に第三の中国が形成されてきたことは見逃さ  
れがちである。イギリス植民地政府というフタをかぶつ  
ていながら、香港社会の中身は圧倒的に中国人たちであ  
り、そこでは強圧的な政治体制が続いた中国本土や台湾  
では継承されえなかつた伝統文化がレセフェールという  
呑気な支配体制のもとで長く息づいていたりもするので  
ある。

中国の伝統社会を色濃く残している新界、西欧風の近  
代ビジネス文明の象徴ともいえる香港島、それを繋ぐ九  
龍という三つの地域を併せ持っている香港社会の複合性  
も伝統社会を残しながら、なお且つ近代的な生活に対応  
可能な香港人あるいは香港中国人を作り出す背景になつ  
ていたと思われる。さらに広東人を多数派としながらも、  
少なからぬ客家や潮州人を有力な勢力としてもっている  
ということが広東語を単なる方言ではなく、香港中国人  
全体の共通語として洗練させ、多数の英単語を借用語と  
して呑み込んでしまうパワーは近代化への適応をより容  
易にしたと考えられる。

実際、大衆娯楽としての映画が広東語で作られ、FM  
ラジオのディスク・ジョッキーが広東語で軽やかに喋り、  
広東語を喋れない人のために広東語学校があるというこ  
とは、一見何気ないようである。これは大変な事態であ  
り、驚嘆すべき事柄である。香港としばしば比較される  
シンガポールを考えると、香港の偉大さがよくわか  
る。シンガポールには中国人社会はあるが、しかしそこ  
では自分たちの母語で映画を作ることできないし、万  
人むけのディスクジョッキーは誰の母語でもない北京語  
で堅苦しくあるいは上品にしかしゃべることはできない。

要するに香港は近代的な中国文化の発信地であり、シンガポールは概ね消費地でしかなかったのである。

こうした香港社会の特質が九七年の七月に中国に返還されたことで、変容せざるを得ないこともまた必然である。皮肉なことに中国に戻ることによって香港はその文化の活力を損なうという事態も考えられるのである。人々が大きな自由度をもって社会生活を送る場を都市だとすれば、表現の自由が与えられない香港は巨大な建築物で囲まれた牢獄になってしまいかねない。香港が近代化のセンターとして存続するかどうかはひとえに中国政府の姿勢に関わっており、一九九八年五月の時点で見限り、香港の将来は決して楽観的ではない。

## 二．香港中国人移民の特質

本書で描かれる香港中国人移民は言わば香港中国人の中のエリートたちである。それは中国本土、台湾、あるいは東南アジア地域から太平洋を巡る先進諸国、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアなどに移住していく中国人たちにも同様に言えることである。つまり、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて大量に移住していた中国人たちがもっていた下層労働者のイメージはもは

やなく、二十世紀後半の中国人移民たちはその多くが高学歴で、専門的知識を身につけ、裕福な人々である。

六章でスマートが描くように彼らは望まれて移住するのであり、その技能や資金をあてにされているのである。香港中国人たちにとっては九七年の中国返還への恐れが大きな移住の動機になっており、将来への不安が彼らを未知の世界へと追いやっている。台湾や東南アジア地域の中国人たちもそれぞれに将来への不安や必ずしも公平ではない社会的処遇に不満をもって、先進諸国へと移住を進めている。

こうした中国人たちにとっての不幸は自分たちの経済的、社会的な発展を先進諸国でしか実現できないことにある。もちろん、こうした先進諸国でも自分の資格や能力に相應しい仕事を見いだすことは必ずしも容易ではなく、一旦市民権を得たあとに家族を現地に残して香港に舞い戻ったり、中国本土で仕事を見つけたりすることも少なくないが、しかし彼らにとって決定的に重要なことは中国の政治体制がまだ信頼に足るほど近代化されていないことである。彼らの政治的主張はもっぱら移住先の先進諸国で行われ、議員などの政治的役職につくものも現れてきている。

二十世紀後半の中国人移民たちは言わば近代的な市民としての発展の一過程として先進諸国へと移住をしていった訳だが、しかしそこには新たな問題が生じつつある。太平洋を巡る先進諸国が中国人たちをはじめとする移民を受入れる背景にあるのは、多民族・多文化社会を容認する社会理念が確立されつつあることである。しかし、だからといってこうした非西欧系の移民たちが全く同等に扱われるということではない。移民たちにとって「フォーモール」なあるいは「インフォーモール」な様々な規制や差別や偏見と戦わなければならない。また、西欧化した先進諸国に市民として居住することは、別の観点から見れば移民たちの伝統文化の継承を危うくしかねない状況を生み出すことでもある。移住後の子弟の教育に伝統文化を反映させることが難しく、世代間の文化的なギャップが顕著である場合は移民たち自身の文化的特徴は急速に失なわれてしまう。

こうした意味でも香港における英語で運営される中等学校への進学率の高さ（一九九一年には初等学校の卒業生の六割程度）を指摘している点（一章）と香港中国人移民たちの特質にキリスト教信者の比率が高いこと（オーストラリアでは約三分の一）を指摘している点

（十章）は興味深い。学校教育における媒介言語や宗教的な性向と中国人としてのアイデンティティにどのような関係がみられるのかは今後もっと注目してよいテーマであり、香港の本土中国化あるいは香港中国人移民の現地化を考える上でも重要な観点であると思われる。

### 三．現代的な移民

二十世紀も後わずかになった現代は世界が一体化しつつある時代である。航空機による人と物の移動量は飛躍的に増加し、通信衛星によるテレビ映像は瞬時に全世界に行き渡る。国際的な労働力の移動が多くの地域で顕著に見られることは二十世紀末の特徴である。ドイツにはトルコ系の移民が、イギリスには西インド諸島からの移民が、フランスにはアフリカの旧植民地地域からの移民が、そして日本にもアジア地域からの移民がやってきている。こうした数多くの移民の中で香港中国人移民たちの特質とは一体何だろうか。本書の訳者あとがきの中でM氏は彼らの国際性と移住後の適応力の高さを指摘し、その背景として香港社会の現代産業社会としての成熟を挙げ、さらに「香港中国人移民現象は、アジアと西洋という旧来の区別を越えて高度な産業社会が生成発展する

という現代社会のグローバル化を、移民という直接的な接触のプロセスにおいて明らかにしているのであり、この点でこの小さな移民グループが意味しているものは、見かけ以上に大きなものなのである。」(五三二ページ)という重要な指摘をしている。

まず国際性について検討してみよう。海外に居住する中国人たちの特性としてしばしば多くの人によって指摘されるのは、彼らの血縁、地縁その他のネットワークの強さであり、範囲の広さである。同姓のものからなる「宗親会」や方言集団などを基礎とする同郷組織のネットワークはしばしば地球大にまでひろがり、個人のネットワークもそれに準じて広汎なものを持つことが少なくない。中国人たちにとって国籍の持つ意味は彼らが意識する文化的特質の持つ意味に比べてずっと小さい。つまり彼らは真の国際人であり、どこにいても真の中国人であることを忘れない。

しかし、評者にとつてはこの中国人の見かけの国際性は本質的にネガティブなものに思えてならない。一章の表題の一節にあるとおり中国人たちは結局、「いやいやながらの流浪者」でしかないのではないかという思いがどうしても残る。中国人たちにとっての安住の地が中国

本土に確立されない限り、自分たちのより有利な発展先を求めて流浪せざるを得ないのではないだろうか。

それともやはり一章の表題のこれまた一節にならつて、彼らが「大胆なパイオニア」であるとするれば、香港中国人移民は二十一世紀の世界を中国人流に変えていく先兵なのだろうか。この場合の適応力とは近代西欧が生み出した産業社会や議会制民主主義への適応なのだろうか。

それとも全てに優先して自己の利益を中心にして考えるという生存のための原則なのだろうか。先進諸国でのエリート層に進出する中国人たちの短時日での参入速度の速さを考えると、中国人化した世界というのも決して夢や幻ではないような気もしてくる。

評者にただひとつ確信していることがあるとすれば、二十一世紀の世界がどうなるか、その鍵を握っているのは中国本土社会であり、その中国をどう変えていくかについては、台湾や東南アジアやあるいは先進諸国に居住する中国人たちが重要な役割を担っているということである。二十一世紀を間近に控えて、私たちが真剣に交渉相手にしなければならぬ中国人は決して中国本土に住む中国人だけではないことを強調しておきたい。

最後に、翻訳について触れておく。本書の翻訳は十七

人の訳者たちによる共同作業であるが、著者の多さと訳者の多さを考えると訳語の統一はかなりの程度にはかられている。訳者と監訳者たちの努力の賜物であり、その労苦に賛辞をおくりたい。特に中国人という言葉を国籍にかかわった概念ではなく、広く中国文化を基礎にもつ人々という文化概念として使用することには、長くそうした用法をやや孤独に用いていた評者としてはまさに砂漠でオアシスを見る思いであり、大いに賛意を表すものである。また出移民のようなやや見慣れない言葉を区別が容易なように用いている点も評価したい。訳文は全体に平易で読みやすい。しかし、「異なるエスニシティ間の結婚」(五章一三五ページ)、「東インド人」(六章一四八ページ)、「北京官語」(十三章三六六ページ)、「南アジア人」(十八章五一〇ページ)という表現にはやや違和感が残ったことを付け加えておく。

原稿は出版されないと社会的な意味がないが、この五二二ページにも及ぶ大部の書物を四千円という個人にとって求めやすい価格で出版された行路社の沢田都仁氏に敬意を表してこの書評を終りたい。